

フムラを訪れて ～フムラの現状、里子たち～

特定非営利活動法人ミランクラブジャパン
理事長 マナンダール マダーブ ナラエン

フムラはネパールの西の果てにあるカルナリ県の5つある郡の一つで経済的に最も遅れている山岳地帯である。この夏、帰国に合わせフムラを訪れた。

海拔 3,000mにある郡庁所在地シミコットは人口5千人ほどの、のどかな田舎町であった。シミコットへは車が通れる道路がなく一番近いバジュラ郡のコレティ村から徒歩で3日かかる。北側のチベットへ続く道も3日かけタクラコットまで歩くと、やっと車道がある。西はインドに接しているが、日用品はチベットから入ってくる方が圧倒的に多い。

シミコット村には小さな空港があり、ネパールガンジから午前中だけ飛行機が飛ぶ。山の天気は変わりやすく当日にならないと飛ぶかどうか分からない。ピストン輸送の飛行機は18名乗りの小さなセスナのため、いつも満席でチケットがなかなか取れない。外国人はもっと難しく料金が3倍かかる。

シミコット村はヒンドゥ教徒や仏教徒にとって生涯に一度は行ってみたい大聖地カイラス山 6,714mへの通り道にある。カイラス山はチベットにあり、シミコットからの巡礼者は10日から2週間かけ聖地を巡る。夏は緑豊かなこの地方は冬は数メートルもの雪が積もり観光客はほとんど訪れない。

そんな陸の孤島であるこの地域で今年の支援69名中53名の里子の支援が決まった。それを可能にしたのはMCNが今年フムラ支部を立ち上げたためであった。

フムラ訪問に合わせ数ヶ月前からチケットを予約した。MCN副会長アマル・マリ氏、会計担当サガル・マナンダール氏と支援者のダルマ・マナンダール氏が同行した。カトマンズからネパールガンジへ約1時間半飛び、翌日シミコットへ約1時間飛び予定だった。8月17日にカトマンズからネパールガンジへと向かった。

その日はネパールガンジに一泊した。

ヒマラヤの山々が連なる麓の空港は午前10時を過ぎると雲で視界が悪くなることに加え、山の谷間を飛行し通り抜けるのも着陸するのも難しいため、よほど晴れていないと飛行許可が下りない。

翌日18日シミコットへは飛ばなかった。空港の人たちによると、このところ天気が悪く4日間もキャンセルになっているとのこと、フムラからの旅行者も帰って来れなくなっているとのことだった。仕方がない、もう一泊を同じホテルに滞在し、次の日を待った。幸い次の日はOKとなった。

フムラ空港は全長549mの小さな滑走路で、私たちの乗って来た飛行機は着陸後エンジンを止めないまま数10分後にまたネパールガンジへ向け飛び立って行った。

飛行機から降りるとそこは別世界。4,000～5,000m級の山々に囲まれた村は石造りの家にトタン屋根で、ほとんどが2階建になっている。5,6階建の家々が密集する海拔1,300mのカトマンズから来た私たちは気持ち良い涼しさと景色に大きく息を吸った。

着いた当日すぐにフムラ支部と会合を持った。タマン支部長初めメンバー10名は全員女性で、アドバイザーは村の長老たちだった。初めにミランクラブの支援のお陰で子供たちが学校へ通うことができ、村の発展にもつながることへ感謝の言葉があった。そして貧しさから、まだ多くの子供たちが支援を必要としており、これからも多くの子供たちに息の長い支援をお願いしたいと希望された。支部のメンバーはこの支援活動に関わることができて、とても嬉しく思っているようだ。

フムラ支部53名の奨学生の内訳は33名はミランクラブからで、選考にもれてしまった20名はダルマ・マナンダール氏

が直接支援してくれることがすでに決まっている。

8月20日、村の集会場に子供たちに集まってもらい、話し合うことができた。ほとんど全員の子供たちが参加し村の生活や現状、将来の夢や目標を話し合った。遠方からの子供たちは母親と一緒にだった。

自給自足の村では現金収入がほとんどなく、農作業や家の仕事で忙しい。お金のかかる教育にまでは手が回らず、奨学金は本当に助かると母親たちから聞くことができた。500ルピー月の奨学金はここではカトマンズと比べるとより有効活用できるように思えた。質素な生活の中で子供たちにとって教育を受けられるのは素晴らしいこと、唯一の贅沢、希望の光に見えているようだ。勉強を続けて先生や看護婦になり村のことをもっと良くしたいと願っていた。

素朴な子供たちを見てダルマ氏は自分にできることをこれからも継続したいと話された。ミルクティーとビスケットが出され、今回の奨学金に限り会計担当のサガル氏から直接子供たちに手渡された。子供たちはとっても嬉しそうだった。

夜は支部長宅に招待され、山村の独特な稗の料理でもてなしを受け歓談した。

ここでフムラに行って実際に見て聞いてわかったことをご紹介します。

農作物はじゃがいも、豆や稗、短い夏の間には数種類の野菜類を栽培するが、米は栽培できない。必要物資は空路に頼るか、チベットから何日もかけての陸路になるので、必然的に価格に反映され、カトマンズの3倍、例えば冷えたビール一本(750ml)の値段は450ルピー、店の品揃えはそれなりにあり、お金があれば手に入る。現地での商売はすぐ北のチベットとのやりとりが多い。地域ではソーラー発電を取り入れており多くの商店でテレビや冷蔵庫が有効に使われている。インターネットがつながるので場所によってはWIFIも使える。山からの湧

水はきれいで水不足の心配もない。テレビはネパールのチャンネルより中国やインドのチャンネルの方が鮮明に映っていて外国のCNNも見られる。電気や飲み水に不自由しているカトマンズと違って、経済力が上がれば、快適な生活はさておき、発展は早いのではと感じた。

私たちが宿泊したホテルは数少ないホテルのひとつで、ソーラーがあるのでお湯が使えた。夏は涼しく過ごしやすいが、冬は零下の厳しい気候となり積雪に備え食料品や燃料は4ヶ月以上用意しなければならない。

数年前に滑走路が舗装されたため、空港を挟んで古くからのバザール(小さい店)がある村と役所地域に分かれ、住民は空港を迂回しなければならない、不便を感じているようだ。

私がネパールを訪れた時季は雨季の終わり頃で、各地の洪水被害が報告されていた。フムラへの経由地ネパールガンジの一つの村も水没しており、家族からは行かないよう言われた。フムラへの予定は当初の4日間から2日間に短縮された。飛行機が飛んでいるうちに帰れるよう、帰りも一日早めた。やっと行けたフムラは思い出深い地となった。



上 フムラの位置
中 フムラの里子たち
下 シミコット村風景

